貞奴フォーラム機関誌 KOHYOH

香葉

第２号

特集 百花に魁し者たち ～貞奴と近代～

第二号に寄せて

本号の刊行にあたりまして、貴重な資料提供など、ご協力をいただきました次の方々に、まずは御礼を申し上げます。

貞奴ご遺族筆頭　川上新一郎　様
成田山貞照寺　様
川上別荘 萬松園　様
名古屋市 文化のみち 二葉館　様
南木曽町 福沢桃介記念館　様
関西電力株式会社　木曽川電力資料館　様

貞奴について学ぶことは即ち、日本の近代化とそのプロセスをより精緻に問い詰めることではないか。そんな思いにとらわれたのは「香葉」創刊号の編集中のことでした。貞奴フォーラムという勉強会を起ち上げたときの動機はせいぜい、貞照寺や別荘「萬松園」を訪問した折に発見した貞奴の実像を、広く世に知らしめたいという好事家的衝動くらいのものでした。芸者という出自の故に、下世話で通俗的な誹謗中傷にさらされてきた貞奴。その種の偏見と先入観、差別的な判定に理不尽を感じると同時に、そのようなディスクールにとらわれることによって、わたしたち自身が貧しい次元に足どめされているような気がし、そこからの自己解放という願いが中枢にありました。

しかし、レズリー・ダウナー女史やペーター・パンツァー氏の著作に触れることによって、貞奴を考えるパースペクティブそのものが大転換いたしました。海外での貞奴の活躍をもてはやすといっても、それは海外の日本ブームに便乗しただけの過大評価にすぎないだろうと、日本社会は受けとめてきました。そういった側面が少なくなかったにしても、実は、貞奴の芸そのもの、洗練の極にあった彼女の舞踊、とりわけ死の芸術表現そのものが、欧州の演劇観、芸術観をゆるがすほどの一大シンドロームであったことを、海外からの視線によって、始めて認識することができたのです。それについては創刊号で、ある程度、分析できたようにも思いますが、彼女の芸を支えた根底の思想や芸術観となると、深く水没したまま、謎に包まれておりました。彼女の前半生にその論拠を求め、歴史の大動脈と彼女との接点を、二号では、できる限り追求したいと、そんな方向性を確認して着手いたしました。

貞奴が誕生した明治四年は廃藩置県や身分制度の変革、郵便制度の発足や鉄道建設開始の年でした。新貨条例や造幣局の創業、岩倉使節団の出発という出来事もありました。その翌年にはマリア・ルース号事件が起こり、日本は初めて国際裁判を経験するわけです。明治九年に廃刀令が出され、相継ぐ旧士族の反乱が明治一〇年の西南戦争へと収斂していき、その後遺症から松方デフレへと滑走する、そんな時代に、貞奴は幼児期、そして少女期をすごしたことになります。

彼女の強靭な精神は如何にして形成されたのか。なんとかそこに肉薄したいと焦燥しつつ、彼女と同時代を生き、彼女と接点をもった明治の群像を追ううち、それらの一人一人が、これまで学んできた歴史教科書風の記述とは、ひと味もふた味も違う色あいで生動してくるのに、息をのまざるを得ませんでした。目を凝らすほどに、新たな迷路が立ち現れてくるという印象でした。一つ一つの対象があまりにも巨大で、おいそれと俎上に載せることができず、周りを徒らに徘徊するばかりで、いくらも歩を進めないうちに、二号刊行の時を迎えたのです。

未だ探索が及ばぬところは、大胆な仮説、もしくは空想、創作などの変化球で一石を投じ、それによって、多方面からの抗議や反論、新情報を頂戴できないかと、在野研究であるが故に、イレギュラーな禁じ手にも挑戦してみました。忠実に史実を追う研究と、大胆な逸脱を可能とするフィクション。この二つを同居させる冒険を敢えて試みたものの、五里霧中で、ともかく、おずおずと半歩を踏み出すことにより、広汎に同行の士を募りながら、諸兄のご批判、ご助言を、首を洗って待つことにした次第です。

貞奴フォーラム代表　藤本尚子

貞照寺の石段玉垣がふと気になった。裏山を背にした本堂は、蛇抜けを心配した福澤桃介の配慮により、頑丈な鉄筋コンクリートのピロティ上に鎮座している。石段を上りきったテラス状のアプローチをぐるりと取り囲んでいる玉垣。そこに刻まれた寄進者の名の、あるものは今でもはっきりと読み取れるものの、幾つかは輪郭がくずれ、判読不能となっている。

風雪は無情だ。石に刻まれた銘ですら永遠ではない。

本堂を背にして右から、伊井蓉峯、河合武雄、井上正夫、小織桂一郎、花柳章太、藤川岩之助、森　律子、尾上幸蔵、林　源之助、中村魁車、大阪　中村福助、實川延若、中村雁治郎、中村歌右衛門、尾上梅幸、市川中車、市村羽左衛門、松本幸四郎、澤村宗十郎、市川左團次、尾上菊五郎、中村吉右衛門、守田勘彌、板東彦三郎、市川猿之助、東京　中村福助と記されている…はずであるが、一部は既に読み取ることができない。

川上音二郎の縁につながる伊井蓉峯などの新演劇界の重鎮や貞奴が創設した女優養成所の第一期卒業生、森　律子などの懐かしい名前と、伝統歌舞伎の大御所がずらりと肩を並べている様は圧巻といえるが、ひっそりと朽ちていく風化の途上にあることを否めない。

他に、階段下の高麗犬一対を、松竹創業者の白井松次郎・大谷竹次郎兄弟が献じている。

貞照寺入仏式は昭和八年十月二十八日。貞奴六十二歳の時である。往年の大女優とはいえ、引退して久しい。すると、寄進者の多くは福澤桃介のスポンサーシップを得ていた縁によって、名を連ねたということであろうか。桃介の演劇界への貢献がいかほどのものであったかが偲ばれるが、それも貞奴とのつながりがあったればこそではなかっただろうか。自殺直前の松井須磨子に対する桃介の冷淡ぶりとつい比べてしまう。貞奴への秘められた想いの深さ。それがなぜか、淋しいのだ。

目次

貞照寺あれこれ …… 4

特別寄稿

貞奴ワールド「萬松園」にて　萬松園オーナー　森田節子 …… 8

貞奴別荘「萬松園」探訪　(株)創寫館顧問　西田　壽 …… 10

「二葉御殿」での貞奴と桃介　二葉館ボランティアガイド　槙野孝子 …… 17

特集　貞奴と近代「百花に魁し者たち」

序　(社)日本作詩家協会 会員　藤本尚子 …… 25

蘇水一條電　浪華萬燭春　元関西電力木曽センター長　仲谷甚作 …… 28

名古屋電燈と桃介　藤本尚子 …… 37

禁猟女譚　～芸者という記号の変遷～　藤本尚子 …… 53

文献紹介

貞奴研究の現状 …… 58

エッセイ・小説

「木曽の御嶽山はなんじゃらほい」　江尻勝典 …… 59

風流夢暦「可免吉異聞」　藤本尚子 …… 63

貞奴フォーラムとは …… 80

貞奴フォーラムのあゆみ

編集後記

霊験記の中の貞奴

養母病魔に臨み十二歳の貞女酷寒の深夜、水垢離を取り尊號を念珠して、其快癒を不動明王に縋るや霊験忽ち難病を治す。

貞照寺本堂の、正面を除く三面を、ぐるりと取り巻く八枚の大型の木彫りレリーフ。胴羽目「八霊験図」と呼ばれるものがこれである。ひとつずつ説明書きが添えられている。上の写真は彼女の信仰開眼とその後の人生を決定づけた最も重要な冒頭の一枚である。

ここには、世間に知られることのなかったもう一人の女性、貞奴ではなく、「さだ」の素(す)ともいうべき「われ」が吐露されている。

「これこそがわたくしです。ここからわたしの人生は始まったのです」

そんな凛冽の声が響きわたるようだ。

すべてを投げ出し、ただ祈る。危機に瀕したとき、人を頼るのではなく、不動明王を心に描いて一心不乱に集中する。三昧の境地。雑念が消滅したとき、霧が晴れて忽然とひと筋の道が示される。科学がどれほど発達しようと、時に荒唐無稽に思われようと、宗教が消滅しない理由はここにある。精神を制御する術。それだけでも信仰の効用はある。

これら八枚のレリーフは、世間の自分への誤解を解くために、貞奴が後世にのこした暗号ともいえる。

「みなさんがご存知の女優貞奴はここにはいませんよ」

「わたしは絶体絶命の死線をこうして乗り越えてきました」

「音二郎への内助の功とよくいわれますが、わたしではなく、お不動さまのおかげなのです」

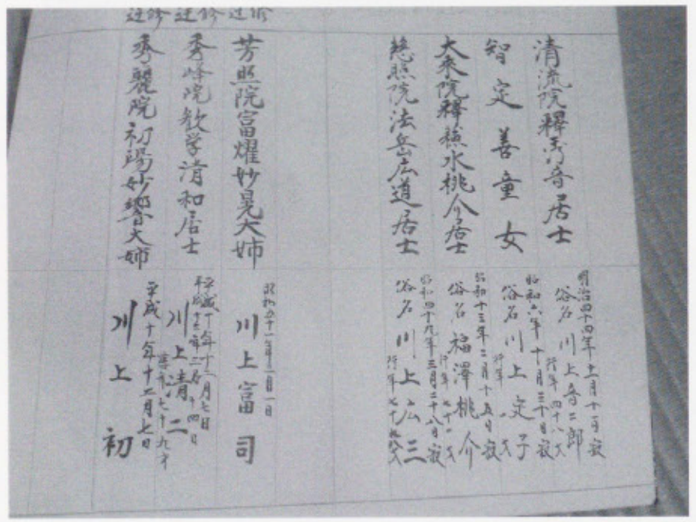
「わたしは大切な方たちの大義の成就をひたすら祈って参りました」

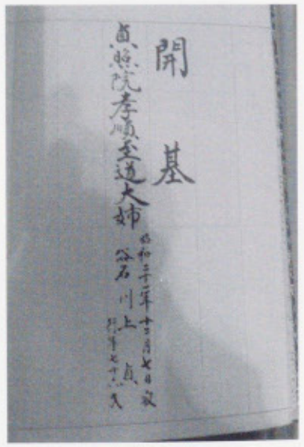
そう語りかけているように感じる。音二郎にどれだけ苦労させられたかなどと、決していわない女性であった。わずかでも恩着せがましさを滲ませると、自尊心の強い夫を助けることは、とうていできなかったであろう。それに、決して弱音を吐かなかった。敗北を認めてしまったのでは、それを克服することなどできないからである。断固として諦めない。このような不退転の気迫を、大事業をなした男たちは彼女から学んだようだ。

信仰者としても傑出していた貞奴。成田山本山深照寺大僧正と貞奴の交誼について記したものがどこかにあるはずだ。貞奴の戒名もそちらから授かっている。曰く、貞照院孝順至道大姉。道を究めた人である。

貞照寺過去帳とご位牌そして戸籍謄本

右の大きい位牌が貞奴のもの。左の小ぶりな方が福澤桃介のものである。生前の貞奴が手元でそっと供養していた桃助の位牌を、貞奴の死後に発見し、共に納めたものと考えられる。

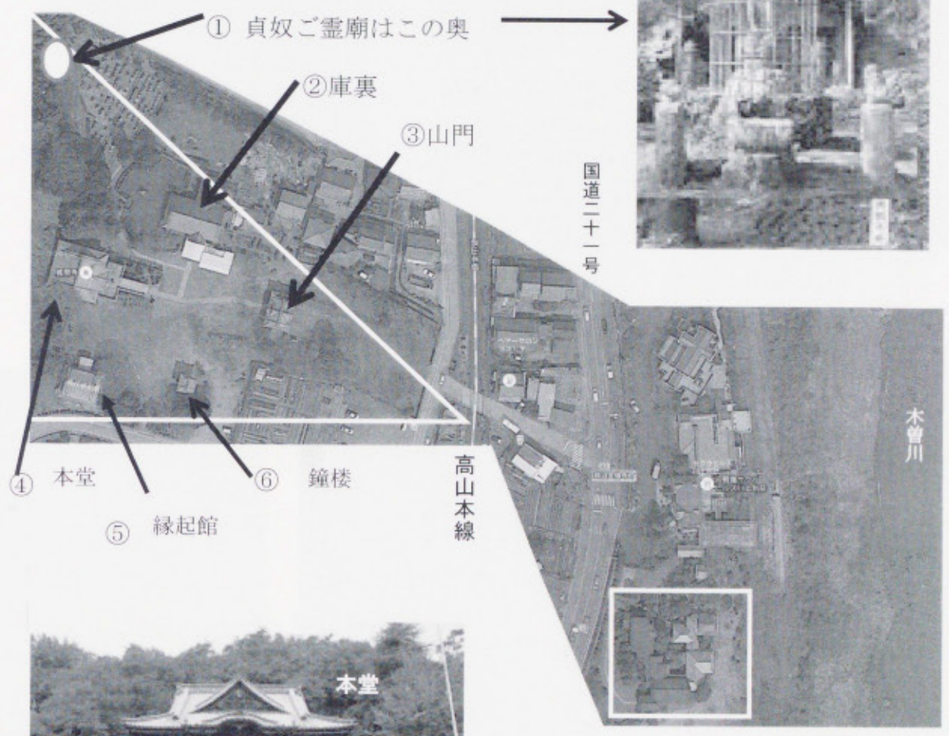




貞奴の曾孫にあたられる川上新一郎先生に彼女の謄本を入手していただいた。それで初めてわかったことが二点ある。本誌創刊号発行時点では、貞奴は当初、富司さんを養女とし、その後に広三さんを富司さんの婿に迎えたとされていた。ところがこの謄本によって初めて、実は広三さんがまず養子として入籍し、その後に、以前から貞奴の身辺の世話をしていた富司さんを嫁として入籍したことが明らかになった。川上新一郎先生自らがこのことに気付かれた。もう一点は、貞奴が正式に濱田可免の養女として入籍していた時期があるという事実だ。しかし、川上音二郎と結婚したときは小山姓からの入籍というのが定説だ。すると、結婚前に濱田から籍を抜いて、農民出身の父久次郎の苗字である小山に復帰していたことになる。いずれにしろ、貞奴の母方の実家、両替商 越前屋時代の小熊という姓は見当たらない。ちなみに平民苗字許可令太政官布告第608号は明治3年9月19日(1870年10月13日)に発布されている。つまり貞奴誕生の10ヶ月前だ。明治8年2月13日に「平民苗字必称義務令」が出され、姓を名のることが義務づけられた。このとき平民だった人々は、どのような姓にするかを自由に決めて届けを出すことができた。

貞照寺と川上別荘萬松園の位置関係は・・・・

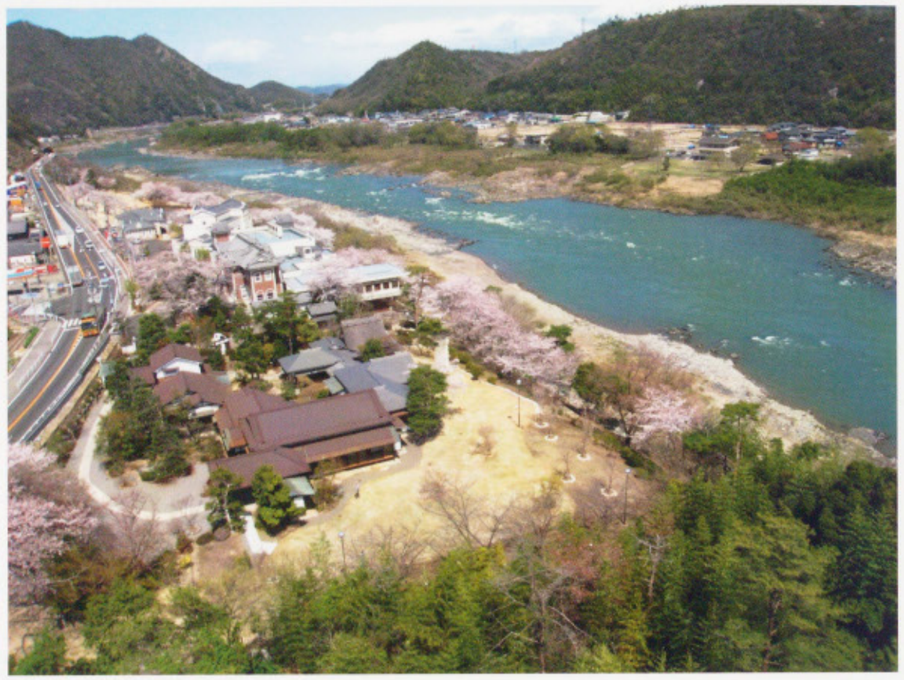
貞照寺の主要な建造物は左の三角形内に散在している。
右下の四角内が川上別荘「萬松園」



貞奴はなぜ鵜沼に寺と別荘を建てたのかと、不思議がる人がいる。当然のことをなぜ不思議がるのかと、それが不思議だった。
桃介と貞奴が木曽川に魅せられ、そこで国家的規模の大事業を成功させたことを思えば、木曽川こそが二人の共通の故郷といえる。その下流域で最も風光明媚な場所を探せば、自然にここに到り着く。

対岸には犬山城と桃太郎神社もある。観光スポットの集積効果を狙った桃介がいち早く萬松園の土地を取得し、その後に貞奴が寺の土地を購入した。昭和４年に貞奴が萬松園を建てた時点では桃介からの借地であった。その後に萬松園の土地も正規の売買契約によって貞奴が桃介から購入した。それらは登記簿謄本と関連書類によって明らかである。

萬松園



萬松園全景と木曽川

萬松園「桐の間」から中庭を観る

特別寄稿

貞奴ワールド「萬松園」にて

《川上別荘「萬松園」オーナー》
森田節子

萬松園　玄関

萬松園裏手　田舎家　舟遊び待合所

サンルーム客間　吉野窓

川上別荘「萬松園」に来て早十年が過ぎました。今、サクラヒルズ川上別荘はたくさんのカップルが誕生する結婚式場として、皆様に御覧頂けるようになりました。この広大な別荘は女性らしい安らぎと、女性ならではの機能性と快適さを備え、随所に楽しさを感じる建物となっています。この別荘を知ることで、川上貞奴の生きた時代背景、人生の岐路にお貞奴の選択、決意を貫き通す生き方に大変興味を覚えました。貞奴フォーラムのメンバーに加わり、勉強会で彼女について知る程、今この別荘で過ごす時間が大切に思えてなりません。知ればわたしも彼女の亡くなったい歳になりますと。あと二年もすれば何でしょうと、同じ七五年の歳月に、わたしはいったいできたのでしょうと、つい自分を振り返ってしまいます。

貞奴は天性の美貌に満ち、人心を掌握する細やかなセンスに恵まれ、自分の身を投げ出すかのように、芸者に音二郎との結婚に踏み切ります。オッペケペー節の選び、貞奴は音二郎に役者の道は未だ険しく、貞奴は人気者になってはいたものの、川上座に東奔西走しますが、借金で苦労をよそに、窮しまして、他所に子供を作ってしまいます。一度は別れを決心した貞奴は、元の鞘におさまったのですが、後にこの子ども、雷吉を引き取って、「雷坊、雷坊」と、たいそう可愛がることになるのです。

音二郎は政治家を目指して選挙に出ますが二度とも落選。金策で日本脱出を試みます。海外公演で音二郎の、今までに無い正劇の建設など、音二郎は政治家なくなって日本中の人々に新しい劇場の挑戦、わらしべ長者のように、周囲の人々に生活の糧を得ずに、公演を中止して目指す演目は、圧力に阻まれるばかりで、新演劇の確立をめざす海外で日本人にしかできない、徹底してこだわり抜く強い精神力を持ったサポート役がどうしても必要でした。これに応えるべく貞奴は今までの物を一旦仕舞い込んで新しい事業の道へと舵を切ったのです。持ち前の勤勉さで、陰から完璧に桃介を支えていくのですが、二葉御殿でのもてなしや桃介の健康管理に八面六臂の活躍をしながら、自分はまるで看護婦のようだと周囲に漏らしていたそうです。ダム建設現場の大洞山荘でも、貞奴の仕事ぶりは皆の心をどれほど鼓舞したことでしょう。

第四の選択は、桃介のダム建設事業に一応の目処がついたときでした。決然として川上児童劇団を設立したのです。好評だったにもかかわらず、桃介の病状が悪化したと知ると、直ちにこれをたたみ、桃介の看病に専念します。これが第五の選択。そして、第六の選択として、死期の近づいた桃介を福澤家へ帰してしまいます。とことん桃介に尽くしておきながら、最後の最後に身を引いてしまうとは、いったいどのような心境だったのでしょう。

萬松園に辿り着く迄の貞奴の来し方に思いをめぐらしながら、この別荘にいると、安らかな温かさに包まれます。これは女主人の貞奴が常に、「共に歩む人の為」を最優先した選択をしてきたからではないでしょうか。人生の最終章に一人、この美しい別荘でのひとときは幸せな満足感にあふれ、貞照寺に参拝しては皆の安寧を祈り、穏やかに過ごしたことでしょう。貞照寺に、自身の苦難の人生を刻んだ木版を掲げたのはさすが、アーティストとしての根性を感じます。

生き粋を極めた証でです。別荘建物の裏手は、こそ、貞奴の忘れ形見。彼女の生きていまして、ゆったりと流れる木曽川に面した後姿が目に浮かびます。飽きることなく川面を見つめ、佇んでいる貞奴の様変わりしたわたしたちの時代、わたしたちの世界を、遠い空から、貞奴に見られているような気がします。

第二の選択は川上音二郎と貞奴の結婚です。何が彼の、何でも突き進む生きてきた音二郎ですが、貞奴との結婚は法螺とはったりで大仕事を成しとげるがれ原動力と燃えて、いくのです。

第三の選択は桃介の危篤の電報を手にしたときでした。これは貞奴を引退させるための桃介の策略だったともいわれていますが、それによって貞奴はやむを得ず、公演を中止して桃介のもとに駆けつけたのでした。これをきっかけに、貞奴は女優を引退することになります。川上音二郎の正妻として、夫の遺業を継ぐべきか、日本の未来のために桃介を助けるべきか、大きな決断を迫られたのです。病弱な桃介が木曽川で水力発電の大事業を完成するには、海外での経験と苦難に耐え抜く強い精神力を持ったサポート役がどうしても必要でした。これに応えるべく貞奴は今までの物を一旦仕舞い込んで新しい事業の道へと舵を切ったのです。持ち前の勤勉さで、陰から完璧に桃介を支えていくのですが、二葉御殿でのもてなしや桃介の健康管理に八面六臂の活躍をしながら、自分はまるで看護婦のようだと周囲に漏らしていたそうです。ダム建設現場の大洞山荘でも、貞奴の仕事ぶりは皆の心をどれほど鼓舞したことでしょう。

第四の選択は、桃介のダム建設事業に一応の目処がついたときでした。決然として川上児童劇団を設立したのです。好評だったにもかかわらず、桃介の病状が悪化したと知ると、直ちにこれをたたみ、桃介の看病に専念します。これが第五の選択。そして、第六の選択として、死期の近づいた桃介を福澤家へ帰してしまいます。とことん桃介に尽くしておきながら、最後の最後に身を引いてしまうとは、いったいどのような心境だったのでしょう。

萬松園に辿り着く迄の貞奴の来し方に思いをめぐらしながら、この別荘にいると、安らかな温かさに包まれます。これは女主人の貞奴が常に、「共に歩む人の為」を最優先した選択をしてきたからではないでしょうか。人生の最終章に一人、この美しい別荘でのひとときは幸せな満足感にあふれ、貞照寺に参拝しては皆の安寧を祈り、穏やかに過ごしたことでしょう。貞照寺に、自身の苦難の人生を刻んだ木版を掲げたのはさすが、アーティストとしての根性を感じます。

生き粋を極めた証でです。別荘建物の裏手は、こそ、貞奴の忘れ形見。彼女の生きていまして、ゆったりと流れる木曽川に面した後姿が目に浮かびます。飽きることなく川面を見つめ、佇んでいる貞奴の様変わりしたわたしたちの時代、わたしたちの世界を、遠い空から、貞奴に見られているような気がします。

貞奴別荘「萬松園」探訪

(株)創寫館顧問　西田　壽

※　創寫館は「萬松園」の運営会社

「萬松園」は、川上 貞奴が正月、五月、九月の年三回、貞照寺(昭和八年建立)に参拝するため昭和四年(貞奴 五八歳の時)に建てた別荘で、各務原市の東部、国道21号線に面した木曽川を眺める景勝地に立地します。

この別荘は、貞奴がなくなる一年前の昭和二〇年に個人に売却され、昭和三一年には都築紡績㈱、そして平成十六年からは、結婚式場「迎賓館サクラヒルズ川上別荘」の敷地内にあり、この結婚式場の森田会長と節子夫人が共同所有されています。(註1)

現在、「萬松園」は一般公開されていませんが、挙式をあげられる方や迎賓館サクラヒルズ川上別荘が主催するランチタイムコンサートやランチ等のお客様を対象に見学会が実施されており、平成二七年五月からは貞照寺とサクラヒルズ川上別荘との「共同見学会」を月一回開催しております。(註2)

別荘の敷地と経緯

木曽川沿いにある「萬松園」は、朝晩の気温差があるため、春は内陸より少し遅れて咲くサクラ、秋には色鮮やかに紅葉したモミジなどの木々に包まれた１５００坪の敷地が来訪者の目を楽しませてくれます。

門をくぐり長い園路を進んでいくと建坪一五〇坪、一部二階建て、雁行型に複雑に配置された部屋数が二六室もある、岐阜県を代表する近代和風の建物が来訪者を迎えます。

萬松園は、昭和四年に建てられた創建当時と同じ場所にあり、歴代の所有者が時間と経費を惜しまず管理されてきたおかげで当時の建物の様子(ふすま、電気の傘も含め)そのままに継承されています。この建物は、各務原市の歴史的建造物でもあることから、平成一九年八月に各務原市指定文化財に指定されております。

名勝木曽川

「萬松園」に隣接する木曽川は、国がこの素晴らしい景観を保護するため、文化財保護法を改正して天然記念物「名勝」を制定し、昭和六年に「名勝木曽川(指定区域　可児市、坂祝町、犬山市、各務原市)」として国の文化財に指定されました。国の文化財指定に先駆けて、川上貞奴が木曽川に面したこの地を別荘建設地として選んだ眼力、美的感性の高さに改めて感心させられます。

西　和夫先生の所見

平成一七年に「萬松園」を調査された神奈川大学教授・文化庁文化審議委員であった西 和夫先生は、所見を次のようにまとめられました。

「東京生まれの川上貞奴が、木曽川を眺める地を終の棲家と定めて貞照寺を建設し、参詣のための別邸を建てた背景には、福沢桃介とともに関わった木曽川の電力開発を通じたこの地への追慕の念があると考えられる。このように萬松園は、大きな歴史的価値を有する点に特色がある。また、創建当初の様相が今も良好に維持され、風呂・便所・台所等の裏向きの部分まですべて現存していて、貞奴の晩年の暮らしぶりをうかがい知ることができるのも貴重である。建物の外観や凝った内部意匠など、建物自体が高い建築的価値を有していることと合わせ、文化財的価値は実に高い。」

建物の構成・機能

この別荘は、玄関・広間棟、仏間・客間棟、田舎家棟、茶室・浴室等、台所・女中部屋棟の五棟からなる書院風、数寄屋風、田舎家風、洋風の和様折衷の建物となっています。

各部屋は、どれ一つとして同じ意匠の部屋がなく、室内を構成するあらゆる要素に貞奴の創意と美意識が投影されています。また、注目すべき建物の機構としては、福沢桃介とともに関わった木曽川の電力開発を通じて電気のすばらしさを具現化した最先端の電気設備と水洗トイレなどの画期的な住宅設備を挙げることができます。

建物の外観

建物の前に立つと重厚感ある書院風の玄関、それ以上に赤い屋根瓦が強い印象を来訪者に与えます。この外観を特徴づけている赤い屋根は、焼き物の瓦ではなく鉄製の屋根瓦であることに来訪者は一様に驚かれます。この鉄の瓦は、電気の便利さを示すため、電気を使用した溶鉱炉であれば大量に均一の製品ができることを示すため、あえて焼き物の瓦を使用しなかったのではないかと思われます。

この鉄瓦は今でも使用されており、８０数年たった今日、鉄瓦の完成度・実用度が奇しくも実証されたのではないでしょうか。現在、この鉄の瓦を作成しようとすると一枚三万円もの費用が必要となるため、傷んだ箇所は焼き物の瓦で葺き直しされております。

玄関

玄関は入母屋屋根でしつらえてあり、正面には大きな花崗岩の靴脱ぎ石、室内は六畳、まるで能舞台の雰囲気が漂うように、目に飛び込んでくる襖絵は砂子金箔霞の上に萌黄色で姫子松が描かれ、電灯の傘は鳳凰唐草文が浮き立つようにしつらえてあります。

廊下

玄関の小部屋を抜けると「桐の間」、「賢人の間」(註3)に導く畳廊下があります。廊下の壁に木製のレリーフが掛けてあり、

このレリーフを開けると電気のスイッチが現れます。無粋なスイッチが人の目に触れないようにとの貞奴の細やかな配慮からだったのではないでしょうか。

電気の配線も天井裏に整備されており、また電線をネズミにかじられないようにとの配慮から栗のイガがびっしり敷き詰められていました。

廊下は、畳敷き、天井は檜皮葺きを裏から見せた美しい化粧屋根裏がほどこされ、部屋と部屋をつなぐ役割だけでなく広い庭も眺めるための縁座敷としての役割も担っております。

広間・桐の間

桐の間は一〇畳、天井は「つり天井」にしてあり高く開放感があり、一間半の黒漆塗りの本床、床脇には花頭窓をそなえ、付書院の欄間は薄肉彫りの獅子の造りとなっています。襖絵は、貞奴の水墨画の師匠である成木星州が描いた上松町桃山発電所の「桃介の滝」と「寝覚めの床」が描かれており、「襖の引手」は、源氏香の「胡蝶の香図」がデザインされております。そして欄間は、桐の一枚板に精巧な「螺鈿が埋め込まれた桐紋」、電灯には、ボンボリ風の傘がつるされ、平安朝の雰囲気を漂わせる部屋となっております。

居間・賢人の間

賢人の間は、八畳と次三畳、天井は大胆に節のある「松の木」を使い、赤松の小梁と竹の竿縁で組まれた無骨なしつらえとなっており、杉戸には如竹作の「賢人と唐子」の彩色画が描かれており、鎌倉期の書院風造りの部屋となっています。

また、天井を太い竹の竿縁で仕切られた次3畳の間は、開放的な広い窓をもっており、天井が葦でしつらえられ、この小間に座って窓の外を眺めると、木曽川の流れや犬山の山並みが目に映り、まるで屋形船に乗っているかのような気分にさせてくれます。

茶室

賢人の間と書斎に挟まれた茶室は、四・五畳、お茶をたてるための水屋と棚がしつらえており、天井は煤竹を竿縁に杉板を卍型の絵柄に張り分け、中央部を網代で仕上げてあります。内部の意匠は、天袋の小襖が源氏香や水鳥などの華やかな絵柄の合わせ張りとなっており、欄間は瑞鳥をモチーフにした花鬘(はなかずら)をあしらった彫り物となっています。

書斎

書斎は六畳。琉球畳が敷かれ、網代組の天井、ガラス窓は中国風組子のしつらえとなっており、茶室をつなぐ入口の襖には墨書が張られ、部屋の随所に中国風の意匠が見られます。平成二五年六月、この部屋を見学された煎茶道「売茶流」の家元の高取芳樹氏は、「まさに煎茶の茶席そのもののしつらえになっていると」と大変お喜びになられました。

↑　入母屋造りの屋根と瓦

←　能舞台のような玄関

仏間

仏間は、四尺三寸に二尺九寸の大きさの畳が五枚敷きつめられ、仏壇が作り付けてあり、天井を一段高くし、灯明風の照明器具をつるし、鏡板には如竹作の「迦陵媚迦(かりょうびんが)」の彩色画、そして天井四周は瑞雲が描かれています。部屋の東側に入れてある板戸には、金泥で菩提樹と蟻が描かれ、西面と南面の壁の下部には菩提樹から歩き出し、また菩提樹に向かう無数の蟻が描かれており、仏間にふさわしい雰囲気を醸しだしています。

仏間天井と迦陵媚迦

サンルーム付客間　（写真右）

サンルーム付客間は、六畳のサンルーム、八畳と六畳の和室で構成され、仏間に接する六畳は、船底天井、ハトが描かれた板戸、吉野窓（丸窓）の造りとなっています。六畳のサンルームは、床を一段低くしてタイルを張り、二方面にはステンドグラスのガラス戸で造られており、ガラス戸はいずれも開け放つことができ、庭と一体感を演出しています。

この建物の客間に共通することですが、壁に掛けられた木製のレリーフで隠された「電気のスイッチ」と同様に、「コンセント」と「使用人の呼び鈴」も壁ではなく敷居に組み込まれており、建物の美観が損なわれないようさりげなく処理されています。貞照寺を参拝するためにこの別荘に滞在した折に貞奴が使用した部屋は、物証はないのですが、この「サンルーム付客間」ではないかと思われます。その理由としては、①仏間に隣接している、②くつろげるサンルームがある③押入れ、トイレ（水洗トイレ）、お風呂などがこの部屋の近くにあるなどの理由からそう感じました。

茶室・浴室

茶室と浴槽は、建物の一番奥の北側にあります。茶室は八畳、北面の天井は網代組、垂木を丸太にした化粧屋根裏となっています。南面の天井は、竿縁を竹でしつらえ、天井板部分を細竹とした平天井となっています。

浴室は、檜製浴槽二箇所を設け、床と腰がタイル張り、壁と天井は漆喰仕上げとなっています。

田舎家

田舎家は、この別荘の一番奥の南側にあります。創建当初は、玄関西側に建っておりましたが、別荘が完成した後に火

災の被害を受け、今の場所に再建されました。この部屋は、かやぶき、入母屋屋根の造りとなっており、中央に大黒柱を設け、太さ九寸五分角の杉材、表面は「手斧はつり仕上げ」、床は「はつり目文様」を意匠に見せた板敷で田舎家風にみせた造りとなっています。貞奴が木曽川の岸に船をつけ、船遊びをした様子をうかがい知る写真もあり、この建物で船待ちをしたのではないかと思われます。

茶室

この建物の庭の東隅にある一棟の茶室は、明治一七年岐阜市中大桑町で造られたものを貞奴が大正一三年三月に美濃長瀬より取り寄せ、大正一三年に名古屋の二葉御殿に移築し、その後、昭和一〇年にこの地に移築されたもので、貞奴に深い関連を持つ茶室として貴重な存在です。

席名は「陶写（心を楽しませて憂いを消すという意味）」といい、にじり口を東に設けた不整形の三畳、次の間は畳敷き三畳と板敷き一畳に接する水屋を持った茶室です。

最後に

平成二四年に萬松園を見学していただきました高円宮憲仁親王妃久子様からは、「各務原市にこんな素晴らしい建物があったとは知りませんでした。機会がありましたら、また、来てみたい」とのお言葉をいただきました。

現在、岐阜県では、平成二五年から三か年をかけて岐阜県内の近代和風建築一〇〇選の調査がされており、この萬松園を調査された名古屋工業大学の麓先生からは、「凝った内部意匠は、高い建築的価値を有している建物であることからこの調査書の中心を飾る建物になるのでは」との感想をいただきました。

平成二七年度に刊行される「岐阜県近代和風建築一〇〇選」の報告書が待たれます。

註

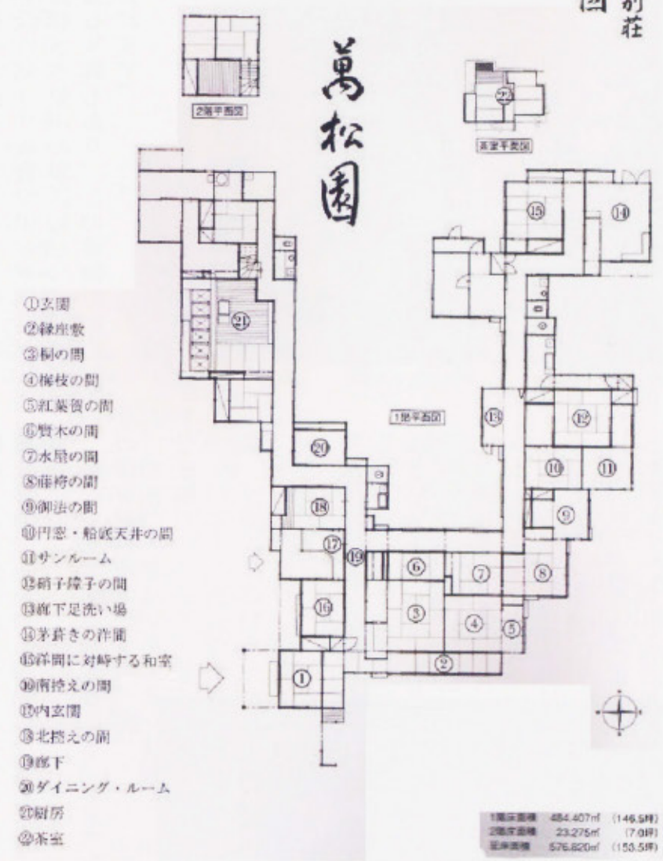
1　香葉創刊号「川上別荘萬松園所有者の変遷と新事実」16ページより　参照

2　問い合わせ先　貞照寺　〒058-3-0202

3　京都ノートルダム女子大学教授　鳥居本幸代女史が部屋の名前を命名。建設当時の室名とは無関係である。

成木星州作　長野県上松町の桃山発電所付近「桃の滝」と「寝覚めの床」

旧川上別荘
全体図



※ 上記各部屋の名称は貞奴が付けたものではなく、現オーナーの時代になって、初めて付けられたものである。

「二葉御殿」での貞奴と桃介

槙野孝子

大正六年、日本で初めての女優と言われた川上貞奴が女優引退声明を出し、翌年には引退興行を終えて名古屋での生活を始めた。

十代では日本橋葭町一番の売れっ子芸者「奴」として、当時の総理大臣の伊藤博文や政財界の重鎮、梨園の名優たちに贔屓にされ、二〇代では「オッペケペー節」で一世を風靡した川上音二郎と結婚し、「川上一座」を率いて公演を続け、海外公演では女優「貞奴」として初めて舞台に立ち、一九〇〇年のパリ万博では「マダム貞奴」と称される程の人気者であった。四〇代では音二郎の死後も「貞奴一座」として公演を続け、音二郎の七回忌を終えたのを機に貞奴は女優を引退したのである。

同じ年、福沢桃介は後に「電力王」と呼ばれるようになるのだが、木曽川水系に七つの水力発電所を建設する電力事業に着手していた。福沢諭吉の婿養子となり、実業界で富と名声を手にしていた桃介が名古屋電燈の社長になり、晩年の仕事として進めたのが木曽川水系の水力発電事業であった。

旧知の仲である貞奴と桃介。貞奴がまだ芸者の見習いである半玉の「小奴」の時、慶應義塾の学生であった桃介との初めての出会いがあり、お互いに惹かれる仲であったがその後二人はそれぞれの人生を歩む道を選んだ。

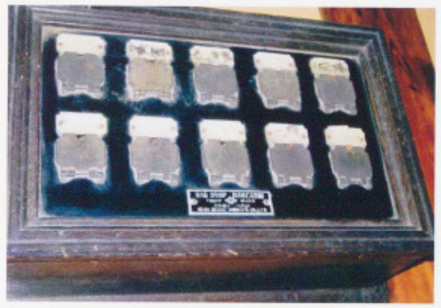
時代を経て実業家の桃介と女優を引退した貞奴。旧知の二人が共に生活する場としての邸宅が大正九年、名古屋市東区東二葉町（現 東区白壁3丁目）に建てられた。表札は「川上 貞」。貞奴は「二葉居」と名付けた。

二六〇〇坪の敷地に、オレンジ色の屋根瓦の和洋折衷の本宅、蔵、使用人が住む数棟の建物と、二階建ての四棟続きの貸家が並ぶ様子を、当時描かれた衝立（「文化のみち二葉館」内に展示）の絵から伺い知ることができる。（左図）

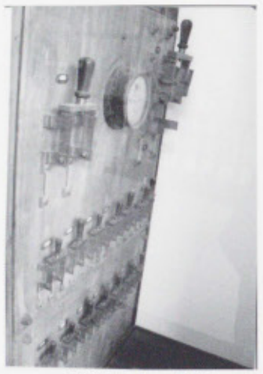
夜になるとサーチライトが庭を照らし、部屋の灯りが豪華なステンドグラスを透かし、外に漏れる光景は周辺の人々から「二葉御殿」と呼ばれるにふさわしかった。邸内には、ガス灯との併用が多かった時代に自家発電装置を備え、停電の時でもこの建物だけは煌々と明かりに満ち、電気の素晴らしさを見せつけるモデルハウスのようでもあった。

部屋には 使用人を呼ぶ電気式の呼鈴もあり、当時の最新技術を備えていた。

また部屋ごとの色彩豊かなステンドグラスは目を奪い、その豪華さに心が躍らされる。大正時代、ガラスは手作りであり、色ガラスで贅沢にしつらえられているステンドグラスは桃介の妹婿「杉浦非水」のデザインである。



この呼び鈴の親機は旧事務所に付いていたもので、遠くの部屋でスイッチを押すと、ベルと共に部屋を表す番号が表示されます。



電気スイッチ盤

配電線

桃介が電力事業を進めていくためには中部政財界人、文化人、地元の人達を接待する場が必要であり「二葉御殿」はその拠点としての役割があった。「二葉御殿詣で」と言って、連日訪れる桃介の仕事関係の人達の社交の場であり、商談の場であり、サロンとして華やかな宴がくりひろげられる場であった。貞奴はかつて国際女優として培った社交術で桃介の良きパートナー振りを発揮していたことであろう。

「二葉御殿」時代（大正九年～一五年）の貞奴と桃介は名古屋の地で何を残していったのか考察してみよう。

桃介と貞奴の日常生活のタイムスケジュール

桃介

- 朝五時に起床、名古屋城の練兵場あたりまで一人でサイクリング
- 帰宅すると茶の間から新聞の催促
- 八時に朝食
- 九時に出社
- 夕食は酒も煙草ものまず、食後の運動に義太夫
- 客との歓談が続いても必ず十時に就寝

貞奴

- 朝六時に起床
- 仏間に入って不動明王に手を合わせお経をあげる
- 八時に朝食
- 桃介が出社した後、午前中は「川上絹布」へ電話で仕事の指図をする
- 午後は来客予定表に目を通し、コックと打ち合わせ、小間使いにそれぞれの分担を指図する
- 桃介が就寝したあとも客が帰るまで接待を続ける

貞照寺所蔵　八重垣姫と勝頼に扮した貞奴と桃介をモデルとした人形

「二葉御殿」では時々素人芝居が演じられた。一例として貞照寺の庫裏に、ケースに収められている大きな二体の人形がある。その詞書きには「勝頼に扮した桃介と八重垣姫に扮した貞奴」とある。これは歌舞伎の「本朝廿四考十種香の場」の配役である。（城山三郎「創意に生きる」より）

勝頼　桃介
八重垣姫　貞奴
関兵衛　藍川清成
濡衣　藍川夫人
謙信　兼松　熙

（藍川清成は桃介の顧問弁護士で後に名古屋鉄道の社長に就任）

貞奴には実業家としての顔があった

「川上絹布株式会社」

「私は今まで絹物ずくめで暮らしましたから今度は世間の人の絹物を製造したいと思っています」

（山口玲子「女優貞奴」より）

大正七年、貞奴は自ら経営する「川上絹布株式会社」を設立

・名古屋市北区東大曽根六郷村（現　北区上飯田通り二丁目）
・敷地一〇〇〇坪
・ノコギリ屋根の木造平屋建の工場で、近くには東京モスリン、東洋紡績の工場があり紡績工場が建ち並んでいた
・「ジョーゼット」「サテン」「奴めいせん」「奴きぬ」等生産
（明治・大正時代の日本は内地向けより輸出向け製品に力を注いでいた）
・十五才～二十才までの女工　四〇人～五〇人
・四五分作業して十五分休憩
・揃いの紺のセーラー服で靴を履き女学生の格好
・昼休みの運動はテニス、プールで水泳
・全寮制で九時から十七時までの勤務
・夜はお茶、お花、和裁を習わせる
　大正十三年に閉鎖

当時は長時間労働を強いられ、食事も悪く、病気になっても休めない女工哀史の時代で貞奴の近代経営は脚光を浴びた。

「川上児童楽劇園」

大正十三年、貞奴は「川上児童楽劇園」を旗揚げ、翌年には東京の二子玉川に寄宿舎つきの養成所を建設する。八～十七才の少年、少女四〇名に音楽と演技を教える本格的な児童劇団を作り、俳優の育成と活発な舞台公演を続けた。明治時代の「お伽芝居」から発展して大正時代は「童話劇」と呼ばれるようになる。
昭和七年に解散。

貞奴が「二葉御殿」時代に実業家として「川上絹布」「川上児童楽劇園」の経営に手腕を発揮した陰には桃介の実業家としてのアドバイスがあったのは言うまでもないだろう。

名古屋の工業化を進めた桃介

木曽川水系に七つの水力発電所（賤母、大桑、須原、桃山、読書、大井、落合）を建設する電力事業に一応の区切りをつけた桃介は、拠点を名古屋から東京に移すべく大正十五年に貞奴と共に「二葉御殿」から去った。
作家の城山三郎が「なごや十話」で桃介と貞奴についてこう綴っている。

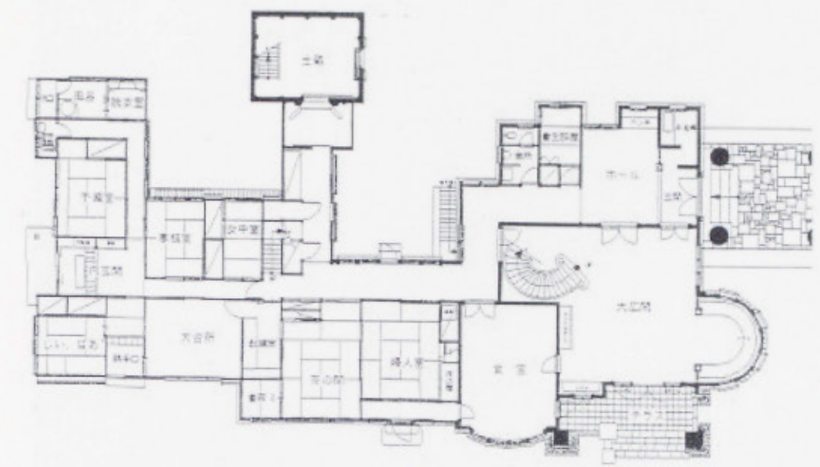
花の嵐を含めた大嵐が来て、一荒れも二荒れもして立ち去った

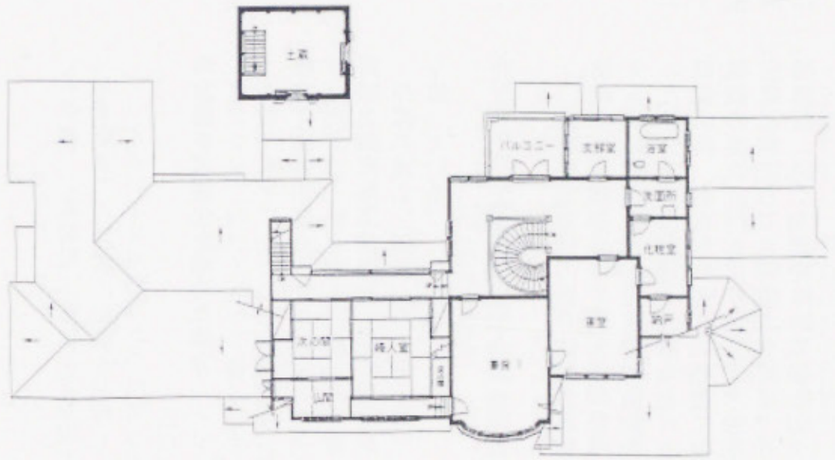
「二葉御殿」時代の桃介は**電力事業**では木曽川水系の発電所建設で水利権を巡って地元との葛藤があり、日本で初めてのダム式発電所（大井発電所）建設の際には資金難で外債募集のためアメリカへ行き成果をあげる。**鉄道事業**では愛知電気鉄道（現　名古屋鉄道）の社長に就任。**製鉄事業**では名古屋電燈の製鉄部門を切り離して木曽電気興業、日本水力、大阪送電と合併して大同電力を創立。その製鉄部門を分離して大同製鋼（現　大同特殊鋼）を創立。

電力、鉄道、製鉄と電気に関わる幅広い事業を名古屋で手

がけ、名古屋の工業化を進めた桃介にとって「二葉御殿」時代は最盛期であり、実業家として第一線で活躍した最後でもあった。そしていつも傍らには貞奴が良きパートナーとして寄り添い、支えていたのである。

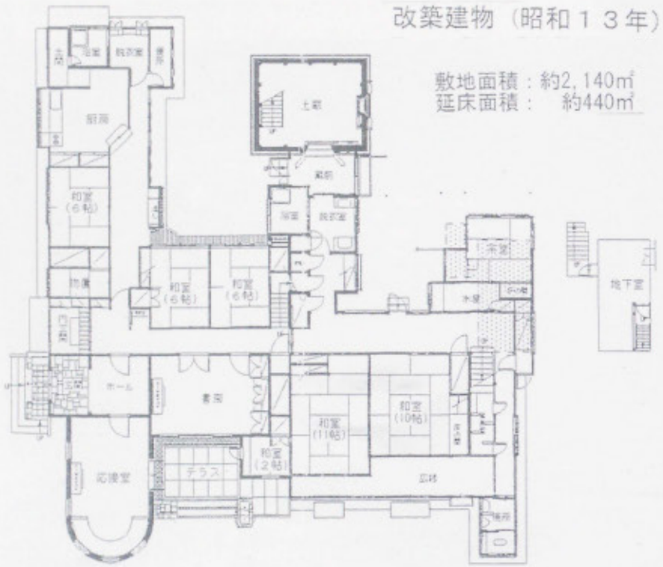
創建当初建物（大正９年）

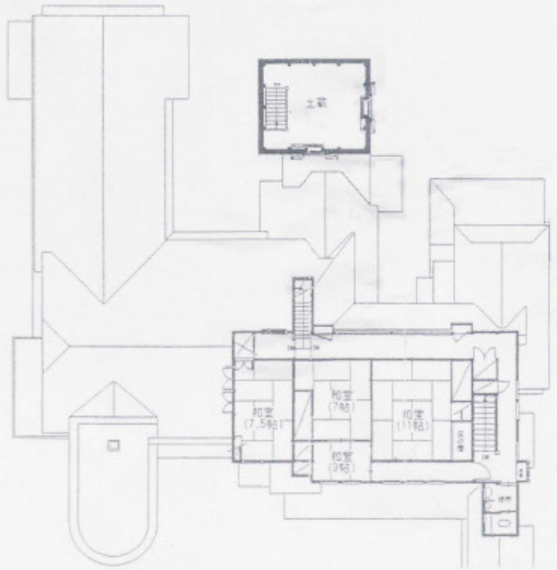




改築建物（昭和１３年）

敷地面積：約2,140㎡
延床面積：　約440㎡





《参考文献》
山口玲子　「女優貞奴」　新潮社
淺利佳一郎　「鬼才福沢桃介の生涯」　ＮＨＫ出版

《資料提供》図面及び写真
名古屋市文化のみち二葉館

特集

貞奴と近代

百花（ひゃっか）に魁（さきがけ）し者たち

序

藤本尚子

貞奴について語るのは何故にこれほど重いのか。それは彼女に関わった人々が日本という国家の未曾有の転換点に立ち、近代化への「どんでん」ともいうべき鉄壁の扉を全力で押し切った男たちであったからだ。

個人の血刀と集団の銃火。見ようによっては内乱の大惨事ともいうべき政変の渦中を、返り血を浴びながらくぐり抜け、圧倒的な権力を掌握した伊藤博文。この男を、子どもが親の背中を見るがごとく、身近な存在として、幼少期をすごしたあまりにも利発な女の子。それが「さだ」、後の貞奴であった。

現代のわたしたちは明治維新を輝かしい理性の勝利のように語る。しかし現にそこに生きていた農工商の多くの人々、政変の意味を知らず、変化を好まぬ者たちにとって、それはあまりにも理不尽で耐え難い大きな災難ではなかったただろうか。その激動をなんとかチャンスとして活かそうともがきながら、波間に沈んでいった多くの者たちの怨嗟に鈍感だとしたら、それは歴史への冒涜に他ならないだろう。

貞奴の実家であった日本橋の両替商「越前屋」もこの波浪を浴びて倒産にいたる他なく、それが故に、小熊という苗字と帯刀を許されていた町与力の末子「さだ」は芸者置屋「濱田家」の養女となったのである。つまり彼女は、明治維新期の下克上の覇者と、それとは真逆の没落町民の、成功と挫折の両極端を、幼い肉と骨に叩き込まれた存在であったということができる。

加えて育った環境が花街という特殊社会である。特殊社会とはいっても、その集合便図の外側の人々がそのようにいうだけのことであって、物事を観照する力において、片肺飛行をしているのは実は花街の外の人たちのほうかもしれないのだ。いささか不遜なもの言いになるが、日本という建前社会

の腹芸ともいうべき胆力を培う場所があるとすれば、それは水商売の領域に他ならないとする意見もあるからである。分野を問わず、一流の人士が蝟集して本音を吐き出し、謀議を凝らす現場がそこだというのは紛れもない事実と思える。この世界の裏と表。ひとりの人間の本音と建て前。この両義性をつぶさに観察し得る特異な位置。そこで成長した聡明な少女の瞳に、この世はどんな影を投げかけたであろうか。

巣を離れた雛のような幼な子にとって、この世は、泥をかいくぐりながら抜き手を切って泳ぐべき過酷な海原のようなものではなかっただろうか。養母の可免がいかほど出来た人であったとしても、「他人の釜の飯」を食みながら、徹底的に鍛え抜かれたのであるから、その道程の辛さ、苦しさ、淋しさは想像を絶する。雛妓として座敷に出るようになってからの彼女はおそらく、息も乱さぬ取り澄ました表情で大人たちの穿鑿を躱したことだろう。そんな悠々とした、しかし実は必死な姿が浮かんでくる。一途で清冽な佇まいが穢れた大人の世界に浄化を迫る。そんな少女の存在を得難いものとして、身辺に置きたいと願った明治の元勲たちの思いもまた、動乱期であったが故かもしれない。平成のぬるま湯においては、鋭敏すぎる存在は、煙たいものとして忌避されかねない。時代という培養土如何が、咲く花の輪の径を決定づけるといっても過言ではないだろう。

したたかな大人たちが激しく駆け引きする世界で、生存本能を研ぎ澄ました少女が初めて心を開いた相手、それが三つ年上の岩崎桃介であった。いまでいえば中三の女の子の、高三の男の子への、そこはかとない思慕のようなものであったに違いない。それを中年の生臭い不倫かなんぞと同類視して不潔な想像をめぐらす世間の料簡の次元の低さはさておき、この出逢いのもつもうひとつの意味を考えてみたい。

気になるのは、桃介を経由して、貞奴が福澤諭吉の思想に触れたかもしれないという一点である。そのとき、伊藤博文の影響下で形成されたであろう彼女の情緒・思想の総体と、伊藤博文とはニュアンスの異なる諭吉の近代思想が、彼女の身体を舞台として、激突したと仮定しよう。通常であれば未成熟なはずの十代の頭脳がどのようなコンピューティングによって相反するものの折り合いをつけたのか、そこが知りたい。

さらには、そのご立派な福澤先生が、彼女のたったひとつの大切なもの、桃介への真心を無残に切り刻んだ張本人であるという冷徹な事実だ。まだいたいけな少女のやわらかな心に鋭い爪をたてたのが、日本人みなが尊敬してやまない近代創建の父ともいうべき一大英傑、福澤諭吉その人であったということが、思春期のナイーブな心にどのような刻印を残したか。桃介との間を無残に引き裂いた諭吉を、貞奴自身は微塵も恨みに思っていなかったらしいことがまた不思議だ。

このあまりにも痛切な悲恋の体験をも成長の糧とし、脱皮の契機としてしまった貞奴の強靭さの背後に、養母であった濱田可免の深い叡智による支えを感じる。生来の気質と、明

治という時代の精神風土の乗算が生んだひとつの奇蹟、それが貞奴だと思う所以がここにもある。

ただし、ここに重要なひとつの脱落事項がある。それは彼女の終生にわたる不動尊信仰の力だ。モダニズム肯定の立場からは敢えて目を逸らすしかないのであるが、宗教自体もまた、近代化の洗礼を受け、巨大な岩礁にぶちあたったのではなかったか。諭吉や桃介の合理精神に対し、不条理の側で防戦を強いられた宗教思想側の、涙ぐましいイデオロギー的再構築があったと考えられるが、その特異なモデルとして、貞奴の信仰心と桃介の合理主義精神の一大対決を慮る次第だ。

ともあれ、貞奴の思春期に大きな転換点をもたらしたであろう桃介という存在とその身辺を洗うことによって、「貞奴」という、かくも絢爛かつ深甚な感性と、どんな苦境をも乗り越えるに足る超人的な、しかし雪折れしない柳のしなやかさをもつパワーを涵養した土壌というものを、透かし見てみたいという、そんな野望がこの特集の原動力となっている。

蘇水一條電　浪華萬燭春

元　関西電力㈱木曽電力所長　仲谷甚作

今回は、福沢桃介の事業の一つである「水力発電」についてお話しいたします。

中京財界に進出した桃介は、いち早く木曽川に目を付けます。当時は、各所とも電力不足に悩んでいました。桃介が筆頭株主となり役員として乗り込んだ名古屋電燈㈱は所詮、尾張藩藩士の寄り集まりで会社経営としては、歯がゆいものにみえたと思います。

桃介は数名の供を連れて、数日間、数回にわたり木曽川に沿って川の流れとその水量、流れの激しさを調べて歩きました。

木曽川での水力発電開発で、桃介が苦労したのは、木曽川の「水利権」の獲得と「川流し」に変わる森林鉄道の敷設でした。

それでは早速、桃介が木曽川で最初に建設した賤母発電所からご案内しましょう。

桃介は、なぜ最初の発電所建設地点として、この地を選んだと思われますか？それは、彼が工学的にも水力発電の仕組みをよく知っていたからだと思います。木曽川の河川勾配は、この賤母発電所地点から上流に向かって急に強くなります。長良川中流の河川勾配と比較しても、その二倍以上です。水力での発電では河川の流量と取り入れる水槽と水車までの落差で発電量が決まります。河川勾配が急なほど数キロメートルでこの落差を得ることができます。

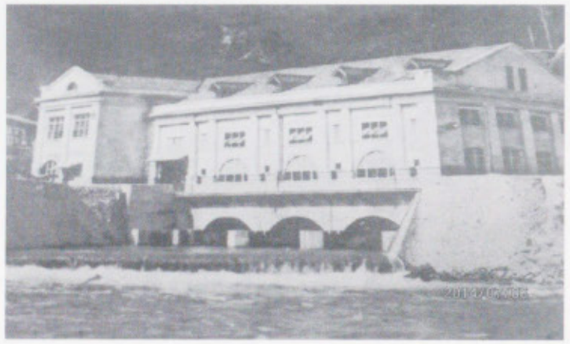
賤母発電所

賤母発電所は大正六年に着工し大正八年に竣工しました。時はまさに第一次大戦中の工事でした。諸物価の高騰、資材や労働力の不足に苦しみました。

賤母発電所の着工に漕ぎ着けるまでに桃介は、木曽川の水利権の獲得で、島崎広助（島崎藤村の兄）と、すさまじい闘いをしています。広助は地元の将来のために簡単に水利権を手放してはならないと地元の有志の結束を図ります。しかし、桃介は政財界重鎮達に懇願し、県や地元の説得に成功し、広助側はついに桃介に水利権を渡します。また、賤母発電所の堰堤を現在の読書発電所の少し下流に築くために、今までの「川流し」で木材を運んでいた代わりに森林鉄道の敷設を帝室林野局から要求され、この工事のめどをつけるまで賤母発電所の着工はできませんでした。発電所の着工にこぎつけた時にはすでに完成は見えていたと思います。ただ、工事中に英国のボービング社（工場はスウエーデン）に発注した水車を積んだ船が、アフリカ喜望峰周りで航行中のところ一時連絡が途絶えたため、桃介は潜水艦により撃沈されたのではないかと心配しましたが、無事到着したというエピソードが残っています。

桃介は自分の造った発電所が完成すると必ず水槽の頂部か発電所本館前に時の著名人の扁額を取り付けています。この賤母発電所では、水槽の頂部に、西園寺公望の「利穿金石功済天下（りは、きんせきをうがち、こうは、てんかをさいす）」の揮毫をかかげています。また、構内には紀功碑を造っています。賤母発電所の紀功碑の題額には、「恩河深而無底（かわのおん　ふかくして　そこなし）」と刻まれています。そして、国鉄・中央西線坂下駅から資材を運搬するためにかけられた橋があります。南木曽町桃介橋の「ひな形」ともいわれる「對鶴橋」は、発電所建設に功績のあった帝室林野局長官、南部光臣の家紋に由来するとのことです。

賤母発電所は、桃介が、その計画から竣工まで木曽川で初めて建設した発電所です。白亜の発電所は木曽川に映え、半円形の窓が特徴で、その外観は木曽谷に、しっくりと溶け込んでいます。



賤母発電所全景写真

大桑発電所

続いて木曽川で二番目に建設された大桑発電所へご案内します。

赤レンガ造りのこの発電所は、ＪＲ中央西線からも、また国道十九号からも良く見えます。日本の近代土木遺産「現存する重要な土木構造物二八〇〇選」に選定され、経済産業省の地域活性化に役立つ近代産業遺産に認定されています。

桃介は「この発電所を村名のまま大桑と名づけたのは、養蚕は古より朝廷が奨励した由緒ある産業で、これにちなみ命名した同村名は瑞祥の意義もあり」といっています。大桑発電所本館正面にある逆Ｕの字は、磁石のＮ極とＳ極を表し、これは桃介が興した「木曽電気興業株式会社」の社章であります。

桜のシーズンには表門周辺の桜がこの赤レンガに映え、とても美しい風景となります。

賤母発電所の「白亜の本館」から一転して「赤レンガの建物」への思いつきは、どこから出てきたのでしょうか？桃介は何回も木曽谷へ足を運ぶうちに、木曽谷が好きになったと思います。ここに造る発電所は、この自然豊かな山と川の流れに、うまく溶け込み、かつ流域の人からも愛着を持ってみてもらえるものでなければならないと、すでに彼の発電所地点決定の段階から、そのイメージがほぼ出来上がっていたと思われます。その思いを専属の建築技師である佐藤四朗に伝え、次々と木曽川に傑作を残していったのでしょう。

大桑発電所は大正七年に着工し、大正十年に完成しています。完成時には会社名は「大同電力株式会社」になっていました。建設当時の水槽の頂部には、賤母と同じように、フランスの政治家で第一次世界大戦後のパリ講和会議にフランス首相として出席した「ジョルジュ・クレマンソー」の扁額が掲げられていました。その言葉は「私は、日本のすばらしい活力に対する心からの賞賛者である」と。余談ですが、私が昭和四〇年に木曽発電所の建設工事に従事した際、木曽発電所工事用電源はこの大桑発電所から送電していました。

大桑発電所の全景写真

須原発電所

次は、桃介が木曽川で三番目に完成した須原発電所へご案内いたしましょう。

発電所本館屋根の八角形の尖塔が特徴となっています。大正十年五月に着工し、翌年大正十一年五月に竣工というスピードで出来上がった発電所です。第一次世界大戦を機に急速な工業の成長をみせた京阪神地域では電力不足のためしばしば計画的に停電せざるを得ない状況でした。中京地域だけでは消費できない電力を大阪まで送ろうと、桃介は早くから計画し、大阪送電株式会社を立ち上げます。大阪までの送電の起点をこの須原発電所構内に構えて工事を進めていました。

この送電線は設計上、一五四〇〇〇ボルトですが、とりあえず七七〇〇〇ボルトで大正十一年七月に大阪変電所（現古川橋変電所）へ向け送電が開始されました。その後、あの関東大震災にもめげず、一五四〇〇〇ボルトの送電線が大正十二年十二月に完成をみます。

ここで電力会社の変遷を見てみましょう。桃介が株を買い占めて名古屋電燈㈱の役員になったのち、そこを飛び出して木曽電気興業㈱とし、さらに各社を合併吸収して大同電力㈱としました。一方、名古屋電燈㈱の流れをくむ関西電気㈱が後に東邦電力㈱となり、松永安左衛門が中心となってゆきます。

須原発電所も平成十九年には経済産業省による「近代化産業遺産」に認定されました。この発電所にも建設当時は水槽

の横にイギリスの政治家「ロイド・ジョージ」の肖像と贈られた言葉が刻まれていました。水槽東側の広場は「桃介公園」と名づけられ桃介の坐像と水神様が祀られています。

また発電所放水路一帯は、三色桃が植えられ四月二〇日前後に美しい花を咲かせます。この桃の木は、桃介が発電所の水車を買い付けにドイツへ行った時に、その会社の庭に咲いていたのを三本頂いてきたのが、日本での三色桃の始まりといわれています。なぜか、ドイツ製の水車は購入していません。

須原発電所の全景

桃山発電所

次は桃介が四番目に造った桃山発電所へご案内します。

桃山発電所の全景

電力王「福沢桃介」の名をとって命名された発電所です。大正十一年二月に着工し、大正十二年十一月には運転を開始しています。桃山発電所はネオ・ゴシック風（壁面は教会堂風、上部は中世城郭風の折衷的なデザイン）です。

桃介は建築技師の佐藤四朗に「木曽谷の自然美に加わる建築美を以て設計せよ」と言い、佐藤四朗は、木曽川をヨーロッパ中部を流れるライン川に見立てて設計したと思われます。この水槽頂部にもグリエルモ・マルコーニ（無線通信の発明

者）の肖像が掲げられていました。「大同電力㈱の桃山発電所にこの写真を呈す」とした言葉が添えられていました。

桃山発電所の取水口は当初、景勝「寝覚の床」の上流に計画されていました。ところが桃介は、河川流量の減少により「寝覚の床」の景観を損なうと考え、取水口を現在の寝覚の床の下流に変更したのです。

桃山発電所は、我が国初めての試みとして関東、関西のどちらへも送電できるように、水車・発電機は五〇ヘルツと六十ヘルツ両用機を採用しました。

発電所竣工後に発電所北側構内に一五〇〇〇kVAの周波数変換機二台を設置して、他の発電所分を合わせて五万kWの電力をいつでも関東・関西間で融通し合えるようにしました。（現在でも寝覚発電所、常盤発電所、御嶽発電所等九万kWが五〇ヘルツで東電へ送電できます。）

現在、東日本は五〇ヘルツ、西日本は六〇ヘルツとなっています。一八八七年東京電燈㈱は五〇ヘルツ仕様のドイツ AEG製発電機を導入し、大阪電燈㈱は一八八八年に六〇ヘルツ仕様のアメリカ GE製発電機を採用したことから国内で五〇／六〇ヘルツの流れとなりました。終戦直後、松永安左衛門は電力再編成と共にこの周波数の統一を強く提案しましたが、戦後の国内事情から経費が掛かることで立ち消えになってしまいました。

桃山発電所にはもう一つ「桃の滝」とも「隠れ滝」ともいわれる箇所があります。発電機が何らかのトラブルで突然停止した場合、今まで勢いよく水車に流れ込んでいた水は、水槽へ逆流し、溢れて余水吐の水路へ流れます。

桃介は、この突然の水流を利用し、地形の岩を動かし勢いよく飛散し、対岸からは突然、滝が現れたかのごとく景観を演出しました。これが「桃の滝」で、鵜沼の迎賓館サクラヒルズ 川上別荘・「桐の間」の襖にもこれが描かれています。

余水路、別名「桃の滝」

読書発電所

さて、次は読書発電所へご案内します。読書村は、与川村の「よ」、三留野村の「み」、柿其村の「かき」をとって、読書村となりました。

読書発電所は大正十年に着工しています。桃介は、当時、すでに大井ダムの建設も始めています。須原発電所、桃山発電所、そして読書発電所と連続・重複する発電所の建設に精力的に立ち向かいます。大正十一年九月には「桃介橋」も完成します。中央西線の木曽谷では一番大きな三留野駅（現在の南木曽駅）からの資材運搬用の橋で、木曽川上流で最も川幅の広い箇所（全長二四七m）に懸けられました。いかにも桃介らしい逆転の発想で、彼の心意気が感じられます。

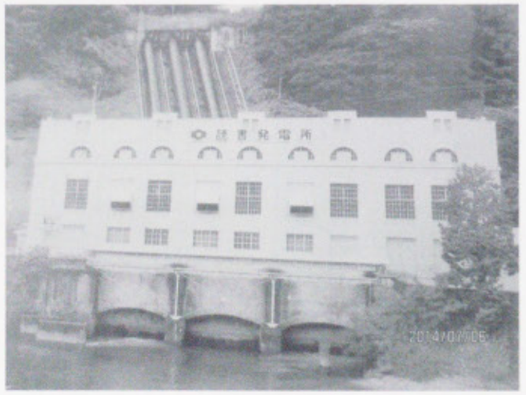
関東大震災を経て、大正十二年十二月に発電所は完成しました。

水槽頂部には、明治の元老・山県有朋の肖像が取り付けられています。

発電所入口（水圧鉄管の最下部）には紀功碑が建てられています。その碑文は「流水有方能出世（りゅうすい、ほうあり、よくよにいず）」。解釈としては、「流れる水は、方法によっては電気にすることができ、世の中の文明を開くことができる」と読めます。完成した当時は木曽川水系では一番大きな発電量を誇っていました。桃介はここでもその余水吐の水を大きく飛散するため最下部に平たい大きな岩を置き対岸から滝に見せるよう造りました。しかし、対岸に住む住民から洗濯物や家の塀・壁が汚れると批判されてしまいます。

大正末期には一時金で解決しましたが、時代が変わり平成元年以降、この問題が再燃します。当初、多くの人は数件の民家ですから金で解決した方が安いとみていましたが、私は次の世代でまた同じ繰り返しになりますよ！と言って、余水吐を下流側に付け替え地下深く潜らせて飛散を防ぎ振動も抑えるよう提案し、実現しました。桃介の遊び心が地元の方には、日常の災難と映ったようで残念な話でした。

平成六年十二月には読書発電所本館、水槽・水圧鉄管そして柿其水路橋が国の重要文化財（近代化遺産）に指定されました。平成四～五年に名古屋大学の小寺教授が何回も本館内等を視察され、重要文化財の指定に関わっていただきました。



読書発電所全景

読書発電所本館、水槽・水圧鉄管、柿其水路橋

大井ダム

次は「男伊達なら、あの木曽川の、流れ来る水、止めてみよ」と謳われた大井ダムとその発電所へご案内いたします。

大井ダムは、日本で初めての高堰堤（高さ一五m以上を高堰堤と呼ぶ。）で発電形式としては、「ダム水路式発電所」です。ダムで堰き止めて落差を造り、さらに三〇〇mほど下流まで圧力隧道で伸ばし、さらに落差を稼ぎます。ダムで堰き止めて出来た落差は、電力需要により出力を調整できます。大井ダムでは六mまで上下させて電力需要に対応することができます。国内の電力状況が逼迫していることから、桃介は早くから、ダム式による発電量を素早く調整できる発電所の建設を目指していたと思います。このダムの建設計画が世に知れたとき、多くの反対意見がでました。

「あの木曽川を全面的に堰止めることなどできるはずがない！」、「万一完成後に、決壊したら下流の被害は甚大だ！」等と・・・。これに対して桃介は、日米の最高の技術者による高水準のダム建設技術と最新の機材を導入して安全なダムを造ることを世に宣言し、工事を始めました。しかし、工事途中で再三洪水に遭遇し、造りかけのダムが決壊し工事は難航を極めました。大正十二年の関東大震災により資金難となり、その打開策として桃介は日本の民間企業としては初めて、米国（ジロン・リード社）で外債を発行し、資金不足を乗り越えました。大井ダムは全長二七六m、高さ五三m余の大ダムとして大正十三年に完成しました。発電所の出力も当時は、

国内最大の四二九〇〇kWとなりました。

大井ダムの右岸には、桃介の厳父である福沢諭吉の肖像と「独立自尊」の扁額が見えます。また紀功碑の碑文は「普明照世間（あまねく世間を明るく照らす）」と書かれており、その続きに建設のあらましが記述されています。

桃介がそれまでに建設してきた発電所（賤母、大桑、須原、桃山、読書）は、すべて「水路式発電所」という形式で、「川流し」には、影響を与えましたが、下流の人々の利水に関しては、ほとんど影響を与えませんでした。しかし、大井発電所の場合は、木曽川本流を堰き止めるということで下流の灌漑用水利権者に対し、毎年、ダムの運用によって生じた損失の補償を行うということで話がつきました。この状態は、昭和十四年、今渡ダムが完成し、このダムで「逆調整」するまで続きました。

大井ダム全景

落合発電所

最後に木曽川で七番目に桃介が造った「落合発電所」にご案内します。

落合発電所全景

この発電所は、大井発電所と同じく「ダム水路式発電所」です。

大正十三年に着工し大正十五年十一月に完成しております。木曽川本流に恵那山系から流れ込む落合川との合流点に築かれた全長二一五m、高さ三三m余の大ダムです。発電所本館は読書発電所によく似た白亜の建物です。

この発電所の特徴は、発電所本館前にそびえる大きな二つの円筒です。これは、今までの余水吐に代わり、発電機が急に停止した時の水圧を吸収するもので「サージタンク」とよんでいます。

ダム水路式の発電所では、ダムから圧力隧道と水圧鉄管の途中に、このサージタンクを設置します。桃介はこれ等の技術を日本では、大井発電所で最初に取り入れています。

落合発電所本館正面には発明王エジソンの肖像と称賛の言葉が掲示されていました。エジソンから「発展してやまざる日本の事業と技術に対し、最高の尊敬と称賛を捧ぐ」との言葉が添えられていました。この時エジソンは八〇歳の高齢でした。これらの肖像も第二次大戦中に取り外されています。

いままでご案内しました、桃介が木曽川で造った七か所の発電所で採用した水車と発電機の製作者をご紹介して、私の物語を終わります。

発電所名	水車製造者	発電機製造者
賤母	BOV（Boving／イギリス）	G.E／米国
大桑	A.C（Allis－Chalmers／米国）	W.H／米国
須原	E.W（Escher Wgss／スイス）	W.H／米国
桃山	E.W（Escher Wgss／スイス）	W.H／米国
読書	E.W（Escher Wgss／スイス）	W.H／米国
大井	A.C（Allis－Chalmers／米国）	G.E／米国
落合	BOV（Boving／イギリス）	G.E／米国

「御礼の言葉」

今回の「蘇水一条電　浪華萬燭春」は、福沢桃介が木曽川から大阪までの送電線を完成させた喜びを大阪変電所（現在は古川橋変電所）の正面に掲げた言葉です。今回の拙文の題目とさせていただきました。

この度は、次の資料を参考とさせていただきました。ありがとうございました。

① 木曽川開発の歴史
　関西電力東海支社編集　昭和六三年一月発行

② 電力王・桃介と木曽川
　関西電力東海支社編集　広報用パンフレット

③ 桃介の造った発電所（賤母、大桑、須原、桃山）の紹介パンフレット
　関西電力㈱木曽電力システムセンター編集

④ 水力発電所設備概要
　関西電力㈱工務部運営課編集　昭和五五年三月発行

名古屋電燈と桃介

藤本尚子

名古屋市中区栄二丁目二の五。この住所はある人々に懐旧の念をかきたてずにはおかないだろう。現在の関西電力そして中部電力、それに大同製鋼の共通の祖先ともいうべき名古屋電燈株式会社が発足した地だからである。現在はここに電気文化会館が建っている。感慨を禁じ得ない。日本の近代化のプロセスにおいて、中部経済・産業界の最大の牽引要因は、電力事業であったと確信するからである。紛れもないその原点。それがここなのかと、立ちつくす思いである。

名古屋電灯会社(後に株式会社に移行)の創立総会が開催されたのは一八八七年(明治二〇年)九月二〇日である。その前年一八八六年(明治十九年)に、日本初の電力会社　東京電灯が既に、火力発電による操業を開始している。明治十九年というと、丁度、福澤桃介がアメリカ留学に出発する直前である。桃介は明治二十年二月二二日に横浜を発っている。名古屋電燈が火力発電の操業開始にこぎつけたのは一八八九年(明治二二年)十二月十五日。同じ頃、桃介はアメリカ留学から帰国している。無論、偶然にすぎないが、何か因縁めいたものが感じられないだろうか。

それ以前に神戸電灯、大阪電灯、京都電灯が開業している。つまり、名古屋電燈の稼働は国内で五番目だ。名古屋電燈が許認可を得たのは東京電力に次いで二番目だったと聞くが、操業開始では後塵を拝した体である。その後、中部地方に乱立気味に勃興していった電力会社各社との合併劇があり、さらには福澤桃介の登場、降板、再登板のめまぐるしい経緯がある。それらの背後には、当然ながら血みどろの死闘があったものと見なければならない。ここでの主役はむしろ、近代化革命ともいうべき歴史の地殻変動である。その俎上で、人と経済は激しく揺れ動いた。

桃介の生家、岩崎家は、真偽定かならずとはいえ、清和源氏の流れを汲むという。桃介自身が古い系図をひもとき、「清和源氏、武田氏族、山梨東部(今東八大郡)岩崎より出づ」と、『日本國誌資料叢書』甲斐の國の部の一文を引用している。祖先からの口伝によると、武田勝頼の妹に随行して武蔵の国に落ちてきたところが、主人が仏門に入ってしまったので、荒子村の百姓になったとのこと。先祖は甲州岩崎村から出ているので岩崎と名乗ったという。桃介は元号が明治と改まる直前の慶應四年に、この荒子村で生まれている。(川越に移転したのは五歳のときである。)

そして明治二年。維新後も封建諸藩による領民の支配はほんのしばらく続いていたが、長州藩の木戸孝允がそのような旧制度の撤廃を強く主張した。それに同調した薩・長・土・肥の四藩連合が封土と領民の朝廷への返還を建白した。これ

が版籍奉還である。このとき、従来の諸藩における知行高は一挙に十分の一に減少したという。が、決定打は明治四年の廃藩置県の完全実施であった。徴税権と各藩の債務はすべて新政府へ。全国の士族に対する俸禄、賞典禄などの秩禄も新政府が直轄する形へと改変された。しかし、新政府はこのような給付を永続化するつもりは毛頭なく、それどころか、直ちに整理・廃止に移行するという短兵急なものであった。つまり、二百万近い士族・卒族が一斉に失業したのだ。官僚として登用された者はごく一部にすぎない。当時の総人口は三千三百十万強。そのうちの二百万人の生活基盤が崩壊した。

こうして発生した武士階級の経済的困窮の始末をどうつけるかというのが内政における最重要課題となった。禄を失った士族を救済するため、なんとか農業や商業の道につかせようと、士族授産の様々な施策が打ち出されたのである。家禄の返納と交換に下付された就産資金。下北半島や北海道などへの移住・開墾の保護奨励。士族団体及び結社に有利な条件で事業資金を貸し付ける授産資金貸与の制度。さらには国立銀行(ナショナル・バンクとはいっても民間資本により国法にのっとって建てられた民営銀行のこと)が各地域に次々に開業し、これが士族事業への融資の太いパイプとなっていった。

このような銀行のひとつが桃介の出自にゆかりのある八十五銀行である。桃介の母はサダといって、婿養子が二代続いた女系家族で、その二代目であった。父の紀一は足立郡原市町の名主(いまでいう町長)をしていた矢部という名家の次男坊であった。学問は無論、絵や書の教養があって、蘭翠という雅号をもつ風流人であった。鋤鍬を持っての重労働ができるような体質ではなかったので、絵や書の特技を活かして提灯や唐傘に意匠を描き、妻即ち桃介の母サダの才覚一本で商っていた雑貨・荒物といっしょに売って生計をたてていた。ところが、紀一の父即ち桃介の祖父が創立者の一人となって八十五銀行が川越に創設されたので、紀一はその書記として採用された。その創立の式典で、小学生の桃介が父の代わりに祝辞を書いて読んだというからすごい。小学生の頃、既に利根川尚方という漢学者の塾に通っており、師が舌を巻くほどの俊才ぶりを発揮していたという。さらに十二のとき、上級の漢学塾に通うため、父の実家、矢部家に一年ほど預けられたというが、その折には二十歳くらいの青年たちを議論で簡単に打ち負かしていたと、これは桃介自身の回顧録にある。つまりは英才教育を受けていたことになる。

要は、桃介もまた、近代合理主義思想を云々する前に、伝統的な学の素養を自家薬籠中のものにしていたということである。これは明治初期の偉人連に共通する精神的基盤であった。武士階級が必須とした四書五経の類の教養を、幼少期から、物事そして自らを律する規範として身につけていたということができる。その上に「近代」を接木したということで、まさに和魂洋才の生きた標本そのものであった。東洋の学と西洋の学の折衷・融合がこの期の要人に共通する思想構造をなしている。後に桃介の師となった福澤諭吉ですらそうであったし、後に伊藤博文にプロイセン型の憲法の有用性を建白した井上毅などは特にそうである。毅が明治九年に記した『憲

法意見控』では、欧米諸国の法制度だけに目を奪われていたきらいをなしとしないが、土佐出身の小野梓『国憲汎論』を知ってからというもの、国典研究の必要性を強く認識するに至り、それから、『古事記』、『日本書紀』、『続日本記』、『日本後記』、『続日本後記』、『日本文徳天皇実録』、『日本三大実録』を残らず踏査し、なお且つ『令義解』、『古語拾遺』、『万葉集』、『類聚国史』、『延喜式』、『職原鈔』、『大日本史』、『新論』のすべてを読破し尽くしたという。洋学礼讃の時代にあって、国学を評価したところにむしろ、この男の非凡さがある。法律顧問ロエスレル等の協力もあったとはいえ、プロイセン型国家構想の立役者として、諭吉や大隈重信を打ち負かす形で伊藤博文らを説得したのであるから、この井上毅なども異色の逸材といえた。日本国憲法があれほどに格調高きものとなったのは、洋学のみならず、漢籍を含む国学の素養をもった人間がしっかりした位置で活躍していたからこそではないだろうか。洋学以外のものを戦後の日本人は決定的に失ってしまった。両輪があって然るべき片輪が壊れ欠落した現代人が明治人を超えられるはずがない。

さて、没落士族の話に戻ろう。士族の多くは土地の交付を受け、開墾に従事したが、自ら鍬をもつことを厭い、人を雇って破綻した者、直ちに転売した者、頑張ってはみたものの困難に耐え兼ねて耕作地を放棄し、転住した者、上手くだまされ、まず作物の取引において、挙句は土地そのものまで詐取される者などが跡を絶たず、さほど時を経ずして、士族授産による開墾地のほとんどが第三者の手に渡ってしまった。

事業資金の貸付はさらに悲惨だったという。後に松方デフレ(明治十四〜十七年)と呼ばれた大不況に見舞われたからである。これにより、ごく一部の例外を除き、士族の事業のほとんどが破産、あるいは休業に追い込まれ、壊滅状態となった。士族の怨みの血涙はいかばかりであっただろう。そんな中で、数少ない生き残り産業のひとつが電力事業であった。名古屋電燈株式会社の壮絶な歴史は、資金力の無い士族・卒族を糾合して設立した会社の稀なるサクセス・ストーリイということができた。

松方デフレのそもそもの遠因は不平士族の反乱にあった。征韓論を掲げた西郷隆盛・江藤新平らが一八七三年(明治六年)に老獪な岩倉具視らとの政争に敗れ、政府に辞表を提出した辺りから不穏な空気が漂いだし、一触即発となっていく。最初の火蓋ともいうべき江藤新平による佐賀の乱が一八七四年(明治七年)である。それに追い討ちをかけるように、一八七六年(明治九年)、山県有朋が提案した廃刀令が実施の運びとなり、これが爆薬に火を放った。帯刀禁止は武士の最後の拠り所ともいうべき誇りを奪うものであった。これが起爆剤となり、まさに燎原の火のごとく、蜂起の気運は全国規模へと拡大していく。熊本県の神風連の乱、福岡県の秋月藩士宮崎車之助を首魁とする秋月の乱、山口県の前原一誠らによる萩の乱などである。国民皆兵と巡査の制が武士の刀に取って代わる一大変革が巻き起こした大騒動であった。刀という武